
彼、彼女と歩む日々

新参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼、彼女と歩む日々

【著者名】

ZZマーク

【新参】

【あらすじ】

彼氏、彼女の間に起きる小さな出来事。その切り取られた小さな
部分と一緒に覗いてみませんか？あなたはどんなパターンですか？

クリスマス生クリーム事件

「ねえ」

僕は美紀に声をかける。が、反応はない。

「ねえってば」

「何?」

美紀はいかにも機嫌が悪そうな顔でこちらを見む。

「まだ怒ってるの?」

「怒つてないよ」

「いや……まあいいや。それじゃあなんか話そづみ

「『まあいいや』って何?」

「いや……それは口が滑りました」

「だいたい、人が機嫌の悪いときによく『ひんぱん』なんて誘える
ね」

「やつぱん怒つてるじやん…」

「怒つているときに素直に『怒つている』なんて言つやつませ
んから」

「だから、やつから謝りてるじゃん。ごめん。僕が悪かった。」

かれこれこんな会話が30分ほど続いている。
今回の喧嘩の原因は、僕の好き嫌いに由来する。

今日は待ちに待ったクリスマスである。
今宵の夜、巷では「キヤーキヤーアハアハ」しているバカップル
がごまんと生まれる日だ。

半年前、僕はその仲間入りを果たした。

正直言つと、付き合つた人は何人もいたのだが、所詮10代のお
付き合い。

今まで深い仲になつたのはほんと無である。

喧嘩も多いけど、美紀とはここまでうまくやつてきた。

初めて僕の彼女、「美紀」と過ごすクリスマス。
今日は大学に入つてから一人暮らしをする僕の家に來ることにな
つている。

プレゼントも用意した。

部屋も掃除した。

なんかいろいろと用意した。

準備は万全だと、僕は確信していた。
今日は素晴らしい日になると。

午後6時、僕の部屋のベルが鳴った。
扉を開ければ、美紀が笑顔で立っていた。

正直僕も立… ry(割愛させていただきます)

とりあえず、彼女を部屋の中に入れて、きれいになつたソファー
の上に一緒に腰をかけた。

彼女は羽織つていたコートを脱ぎ、持ってきた少し大きな袋の中
から何かを出そうとしている。

「今日は俊樹にプレゼントがあるの」
そう言って彼女が取りだしたものは、僕が以前から欲しがつてい
た時計…ではなくて、明らかに手作りと分かる、ワンホールのケー
キだった。

はい、ここで問題発生。

僕は甘かつたり、くどかつたりするものが好きではない。

もちろんケーキといった類も例外ではない。

生クリームがたっぷり塗られた、そいつはプラスチックのケース越しに僕を睨んでいる。

だがしかし、手作りのものに對して「甘いもの苦手なんだよね」なんて口が裂けても言えない。

ましてや、美紀が作ってくれたものである。

「これ作るのにかなり時間がかかったんだよ。俊樹のためを思つて作ったんだから」

「はい、もう逃げ道はありません。

「全部俊樹が食べていいんだからねーーー」

「う・・・わあ・・・

僕の目が泳いでいることを悟られないよう、僕は少し大袈裟にリアクションを取った。

「うわっ、めっちゃくちゃうれしいやん。これくらいなら一人で余裕だね」

はい、自分で逃げ道潰しました。

どうする、僕、どうするよ？

ご丁寧に使い捨てのスプーンとお皿を持参してくれた美紀は、さつさと準備を済ませ、もう一口皿のケーキを僕の口の前に運んでいる。

僕は覚悟を決めた。

その忌々しき生クリームで身をまottたケーキを、思い切り口中に入れ、全力で咀嚼した。

「味はどう？」

「ウン、スゴクオイシイ！」

「本当っす、嬉しい！…たくさん食べてね

少しえずきながら、僕は今までの人生で最高の笑顔を美紀に見せた。

これまたご丁寧に、美紀は僕がケーキを飲みこむのを待つては、次に口へ運ぶケーキを準備している。

美紀に語られちゃだめだ、語られちゃだめだ、語られちゃだめだ

…。

その気持ちだけで僕はひたすら咀嚼と流飲を繰り返した。

だがしかし、口に運んで10回目頃だつたろつか。
僕の目から何かが流れた。

「えつ、俊樹どうしたの？」

そのとき僕は気付いていなかつた。

僕は泣いていた。

彼女の気持ちがうれしかつたから？

一理あるかもしれないが、そのときの僕の理由ではない。

もう限界だつた。

これ以上食べたら、胃の中のものを全て現実世界に戻してしまつ
に違ひなかつた。

「『ごめん、本当にごめん。実は生クリーム苦手なんだ…。』

その言葉を皮切りに、僕の涙は止まらなかつた。

僕の涙が止まるころ、残つたケーキは全て美紀が食べてしまつた。

「どうして苦手なら最初から言わないのー？」

「せつかく美紀が作ってくれたものを、『無理です』なんて言え

ないでしょ？

「言い方によつては、お互に納得のいく解決策があつたかもしないじゃな」

「少なくとも僕は、あの短時間でそれを見つけることは出来なかつた」

「そういうことを言つてゐるんじゃないの。ああ、ケーキなんて作らなければよかつた」

「本物はじめんつてば…」

そこから美紀は黙りこくつて、今に至る。

話しかけても無視、あるいは簡単な返事だけである。

そりゃあ、そりである。

自分が一生懸命作ったものを、決して感動ではない涙を流しながら食べられるなど最悪の極みである。

僕も普段はすゞく頼りないが、今は男になるべきだ。

僕はベッドに腰掛ける美紀に背後から近づき、やつくりと抱きしめた。

一瞬、振りほどかれるかと思つてドキドキしたが、そのような素振りを見せなかつたので、僕は全力で美紀に謝つた。

「本当にめん。美紀がせっかく作つてくれたのに、食べきれなくて。」

「一生懸命作ったのに…」

「知ってるよ。だから僕は全部食べようとしたんだ。自分の嫌いなものだとしても、美紀が作ってくれたものだつたから一口も付けずに戻すなんてことはできなかつたんだ。」

美紀は僕の腕の中で小さくなる。

「嫌いだつて知つていれば、作らなかつたんだよ」

「それもごめん。普段から甘いものは避けていたから、言いつタイミング逃しちゃつていて。言い訳がましいからこれ以上言いつもりはないけど、これから嫌な食べ物があればすぐここに言つよ。」

美紀は僕の腕に顔を押し付けた。

その姿が愛しくて僕はすこしきつづ抱きしめる。

「もし作つてしまつたものなら、全部文句言わずに食べられるような男になるからさ、ね?もう仲直りしようよ

「今度からあたしも甘いものには気をつけよ

美紀は田元を拭い、僕の方に向き直り…。

その後は僕のプライベートなので、あえて伏せておく。

その後の夜は長い。

皆さんの想像に任せるとしよう。

あともう少しだけ、ジングルベルは鳴りやむ時刻だ。

隣で眠る美紀の顔は、あらゆる差し引きをしても…かわいい。これは僕だけの特権である。

些細なことで喧嘩はするけれど、なかなか順調なお付き合いだ。

いつの日か今日のことが笑い話にできたらなあ。

そんなことを思い描きながら、美紀の手を軽く握り、僕も目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8066z/>

彼、彼女と歩む日々

2011年12月25日20時54分発行